

### Ⅲ まとめ

今回の大学生調査においては、インターネットと非行行動を短絡的に結びつけるのではなく、彼らをとりにくく日常的な社会関係の文脈のなかで、インターネット利用と非行の関連性を探ろうと試みた。

調査対象学生のほぼ全員が携帯電話を所有し、8割以上が自分自身ないしは家族と共用のパソコンを所有している。この2つの情報メディアは、大学生にとって生活必需品ともなっている。そして、携帯電話はメールの交換、パソコンはインターネットによるホームページの閲覧という形で、利用の分化がおこなわれているようである。

インターネットは1日24時間の間、常に誰かが利用しており、特に夜10時から深夜3時台までが利用のピーク時間帯となっていることは、学生に特有の傾向かもしれないが、これまでの情報メディアにはみられない特徴といえよう。

彼らが好んでアクセスしているものは、映画、音楽、テレビ番組、イベント等の紹介から占い、ゲームまでを含んだ「娯楽情報」、「生活・趣味・実用情報」、そして「個人のホームページ」などで、「個人のホームページ」が多くの利用者をひきつけていることは、インターネットが従来のマス・メディアとは異なった情報メディアとして機能している事実を示すものといえる。青少年の非行や犯罪と結びつけて危惧されている「アダルト情報」や「(麻薬・銃などの)裏情報」に好んでアクセスしているものはごくわずかであるが、「ポルノ画像」を見たことのある者は男子学生の6割に達している。

インターネット導入に伴う生活上の変化として彼(女)らが認識していることは、「情報の事前収集」、「趣味・興味の拡大」、「友人とのコミュニケーション増大」などが目立ち、利用の実態と見合っている。ただ、しばしば“情報縁”といった言葉で論じられている「新しい友人の増加」は、それほど一般的な現象とはいえないようである。

このように、生活のなかにかかなり深く浸透しているインターネットに対して、彼(女)らはこれをただ無批判に利用しているのではなく、「テクニカル・ディバイド」や「プライバシー侵害」について7割から8割近くの者が懸念を表明している。「非行の増加」を案じているものは3割ほどである。そしてインターネット利用の年齢的規制を必要と考えているものも6割ほどが存在する。

大学生という身分は、それまで自分が育ってきた家族からの離脱と新しい社会の人間関係の構築との狭間にあって、多かれ少なかれアイデンティティの危機に直面する存在である。そうしたなかで、今回調査対象となった学生の多くは、身近な友人との連帯のなかに自らの安定を求めようとしている。

彼(女)らにとって最も心安らぐ場は「親しい友人・恋人と一緒にいるとき」(51.5%)であり、悩みを打ち明けて相談する相手としてもまず「友だち」をえらび(58.7%)、最もストレスを感じる時は「友だちとのつき合いがうまくいかないとき」(28.2%)なのである。そしてもっとも恥ずべき行為として50%のものが「友だちを裏切ること」をあげている。これらの場面において「親や家族」が指摘されることはきわめて少なく、「教師」にいたっては皆無といってよい。

友人との交流や連帯が生まれる場として、サークル活動の重要性を無視することはできない。今回の調査対象者の8割強がこれまでに何らかのサークルに参加した経験を持ち、現在も約半数が参加している。また、ボランティア活動に参加した経験をもつ者も半数に近い。なかでも平生「友人から助言を求められたり相談を受けることの多い」リーダー・タイプの者は、サークル活動のなかで役職につき、ボランティア活動にも積極的に参加していく傾向が強い。

大学生の多くにとって、現在、親との結びつきが現実的にも意識の面でも希薄になりつつあるにしても、パーソナリティの基礎的形成期において両親の果たした役割は、彼(女)らの現在の生き方の上に大きな影響をもたらしていることは否定できない。どのような友人を選び、どのような交わりを結び、どのような行動を共にするかといった点についても、それまでの家庭における親子関係のあり方が多かれ少なかれ反映しているといえよう。

今回の調査において親との関係に関しては、親のしつけにどの程度の強圧性がともなっていたか、親の期待をどの程度負担に感じているか、親に叱られたときにどのような気持ちになったか、の3点をたずねている。その回答結果は、しつけの強圧度に関しては「強圧的」と感じたものと「自由」と感じたものが4:6、親の期待を負担に感じている程度については「たまに」感じるものが半数ほど、「感じていない」ものが3分の1、そして親の叱責に対しては「怖かった」「あたまにきた」「反省した」という回答がそれぞれ3割前後ずつであった。

以上に略述してきたインターネットの利用実態、および、社会関係は、非行行動とどのような関係にあるのだろうか。

今回取り上げた非行行動は、子供から大人への成長期に伴う通過儀礼ともいえる、反抗的あるいは背伸び的な逸脱行為から、一時的な衝動にかられた非行的行為、犯罪にもつながりかねない危険な行為、さらには犯罪そのものとも言える行為まで多岐にわたっている。具体的には23項目の行為を列記して、それぞれの行為をした経験の有無をたずねている。

全体の結果は次のとおりであった。

非行的行動経験（以下の項目について経験が「ある」と回答した者の割合）

(1)パチンコをした	42.5	(13)デパート、スーパー、本屋、商店で万引きした	27.5
(2)親にかくれて酒・ビールを飲んだ	63.2	(14)道においてある自転車を無断で乗った	27.5
(3)タバコをすった	56.5	(15)友だちと一緒にあって生徒をひどくいじめた	15.8
(4)買い物をしたとき余分にきたつり銭をだまって受け取った	64.0	(16)万引きなどで取ってきた品物を買ったりもらったりした	21.5
(5)無免許でオートバイや自動車を運転した	30.9	(17)とめてある自転車、バイク、自動車の部品やかざりものをとった	13.2
(6)学校で禁止されている服装、髪型で登校した	43.2	(18)人や生徒をひどくなぐって傷を負わせた	11.7
(7)学校の授業をさぼった	91.1	(19)人や生徒をおどかして金や物をとりあげた	3.0
(8)ポルノ雑誌を自動販売機から買った	9.9	(20)学校で生徒の品物や金をとった	5.4
(9)成人映画を観た	21.6	(21)シンナーやトルエンをすった	0.9
(10)親にことわらずに外泊した	42.8	(22)親をひどくなぐった	3.5
(11)親の金をこっそり持ち出した	35.1	(23)よその家に入り、金や物をとった	2.4
(12)学校のもの(窓、机、いす、壁など)をわざとこわした	23.0		

携帯電話の利用と非行行動との関係については、携帯電話の利用頻度の多い者、特に1日10回を超える者の間で非行行動へのコミット率が高いという傾向がみられた。ただこの結果は、携帯電話を頻繁に利用することの結果として非行行動が触発されるという因果関係を示すものとは考えにくい。さらに厳密な検証が必要である。

インターネット利用と非行行動との関係についてみると、携帯電話の場合とは反対に、インターネットを利用していない者の方が、多くの非行行動に対するコミットの率が高く、長時間利用者の方が相対的にコミット率が低かった。これも、インターネットを利用すれば非行行動が減少するといった単純なものではなく、利用者と非利用者の特性をさらに詳細に調べることが必要であろう。

また、利用するインターネットのコンテンツも重要である。ポルノ画像やアダルト情報、(麻薬・銃などの)裏情報にアクセス経験をもつ者の非行コミット率の高さは、このことを示唆している。

先に見たように、今回調査対象となった大学生たちは、携帯電話やパソコンのインターネットを積極的に利用していると同時に、その功罪についても明確な認識や判断をもっている。こうした態度的な側面が、インターネットと非行との関

係にどのような影響を及ぼしているかを、さらに検討しなければならない。因果関係の性急な断定は危険である。

今回の調査対象者にとって最も重要な人間関係は友人関係であったが、その友人との絆は、一般に彼（女）らの非行的行動へのコミットメントを抑制するよりもむしろ促進する要因として機能しているようである。ただ、その促進機能は、彼（女）らを社会から隔離して反社会的行動の温床となるような陰湿なものではなく、子供から大人への成長の過渡期において、自らのアイデンティティを拘束的な規範からの脱皮という行為によって獲得しようとする、解放的な通過儀礼の司祭者としての機能とでもいうべきであろう。

一方、親との関係においては、今回の調査で質問に取り上げた3種の関係のうち、「親からの期待に対する負担感」の強弱が非行行動へのコミットメントと関連をもっていることが示された。すなわち、親の期待を負担に感じている程度が強い者のコミットメント率が、いくつかの非行行動項目においてみられたのである。親からの過剰期待に基づくフラストレーションが友人との交流における解放感と相俟って、非行行動へのコミットメントを誘発するのかもしれない。

なお、学校におけるサークル活動やボランティア活動への参加と非行行動との関係については、体育系サークルの参加者の間に比較的高い比率で、非行行動へのコミットメントがみられた他は、とりたてて顕著な関連性は見られなかった。

インターネットの利用実態と社会関係のあり方のそれぞれについて、非行行動との関連性を検討してきたが、インターネット利用と社会関係との間には、どのような関連があるのだろうか。もし、たとえば、友人との絆を重視する者がインターネットをあまり利用しないとか、親の期待に強い負担を感じている者がアダルト情報に好んでアクセスするといった傾向があるとすれば、複数の要因が非行へのコミットメントを相乗的に促進していると推論される。

こうした問題関心から、非行行動との関連性がみられた「社会関係」と「インターネット利用」相互間の相関を分析してみた。その結果、両者の間に一貫した関連性は見出せなかった。しかし、インターネットの利用と非行・犯罪行為の間に、因果関係を安易に想定する過ちを防ぐためにも、今後さらに詳細な調査研究が望まれる。